

ピンチをチャンスに！ コロナ禍だからこそその、 気づきとその対応

新型コロナウイルスのまん延により、私たちの生活は一変した。特に、介護従事者にとっては影響は大きく、リモートワークができない上に感染対策は手を抜かず、オン・オフともに緊張感をもち続けていることだろう。

ただ、手間が増えた、制限が増えたなどと嘆いているだけでいいのだろうか。介護や医療の専門職集団として、利用者や家族と向き合ってきた老健施設は、コロナ禍というピンチを乗り越えるだけでなく、ピンチをむしろ味方につけて、よりよい介護や支援につなげられるのではないか——。今回は、3施設に事例を書いていたが、前向きかつ柔軟に取り組んでいる様子が伝わってくる。取り組み内容はもとより、こうした姿勢は大いに参考になるのではないだろうか。

事例1

コロナ禍における気づきと変化

「つなぐ」ことから見えてきた老健施設スタッフの役割

品田慶太 自立支援部部長、事務長（理学療法士）

剣持卓也 地域共生推進コーディネーター（園芸療法士）

菊地奈穂子 リハビリテーション部主任（理学療法士）

社会医療法人北斗 十勝自立支援センター 介護老人保健施設かけはし（北海道）

事例2

ニューノーマル時代を駆け抜ける老健施設

保坂和輝

介護老人保健施設甲州ケア・ホーム（山梨県）在宅生活課 課長

事例3

感染対策

～私たちの備えと覚悟～

鈴木太佳人

介護老人保健施設三方原ベテルホーム（静岡県）事務長